

日本文学科	小論文	受験番号	氏名
-------	-----	------	----

次の文章を読んで参考にしつつ、あなたが気になる（好きな、あるいは、違和感のある、など）擬音語あるいは擬態語をとりあげ（二つまで可）、思ったこと考えたことを、六〇〇字以上八〇〇字以内で書きなさい。

新聞の「総合4」面に「不祥事連鎖 きしむ足元」という、大きな活字の見出しがあった。例えば『広辞苑』第七版は「キシム」を「物と物とがこすれ合つて音をたてる」と説明している。小型の国語辞書、例えば『集英社国語辞典』第三版（二〇一二年）では「硬い物と物とが接して、互いにすれて音をたてる。きしる」と説明している。「キシキシ」という擬音語があるが、これは擬音語語基「キシ」を重ねたもので、その「キシ」に動詞をつくる接尾辞「ム」や「ル」をつけると動詞「キシム」「キシル」ができる。だから「キシム」の語感あるいは語義の根底には「キシ（キシ）」があるといってもよい。「キシキシ」の程度がよくなる」と「キシキシ」となる。

いずれにしても「こすれ合つて」だから二つの要素が必要になる。見出しを書いた人は、古い木製の廊下などを歩いている時、歩きたびに「ギシギシ」音がするというようなイメージだったのだろうか。しかし、二つの物がこすれ合つて、きしんだ結果、音が出るといふことは、実際にはあまり多くないように思う。ここは「キシム」よりも「ユラグ」がびつたりこないか、というのが筆者の感覚だ。足元が揺れてきているという表現だ。しかし、擬音語からうける「語感」にも幅があるから、筆者の感覚もそうしたものの一つにすぎないかもしれない。

「あなたはどんな時にキシムという語を使いますか」という質問にどう答えるか。筆者にとって、「キシキシ」という擬音語に対応する「具体例」はカミキリムシの「鳴き声（威嚇音）」だ。「鳴き声」といっても鳴くのではなく、前胸と中胸をこすり合わせて音を出しているわけで、「キイキイ」というような音だが、これが筆者の思い浮かべる「キシキシ」の具体例だ。実家の台所の外にあったイチジクの木には、実がなる頃には奇麗な色のゴマダラカミキリが何匹も来ていた。夏にカブトムシを探りに近くの里山を廻っている時には、シロスジカミキリやミヤマカミキリといった大型のカミキリムシに出会ったが、懐かしい思い出だ。

（今野真二『日日は日本語』より）

（岩波書店）

二〇二〇年度 公募制推薦入学試験

日本文学科

小論文

受験番号

氏名

A large rectangular area filled with a grid of dashed lines, intended for writing an essay. The grid consists of approximately 25 columns and 30 rows of small squares.

8
0
0

6
0
0